

# 「檸檬」論

遠藤 伸治

えたいの知れない不吉な塊が私の心を始終圧へつけてゐた。

焦燥と云はうか、嫌悪と云はうか——酒を飲んだあとに宿酔があるやうに、酒を毎日飲んでゐると宿酔に相当した時期がやって来る。それが来たのだ。これはちよつといけなかつた。結果した肺尖カタルや神経衰弱がいけないのではない。また背を焼くやうな借金などがいけないのではない。いけないのはその不吉な塊だ。以前私を喜ばせたどんな美しい音楽も、どんな美しい詩の一節も辛抱がなくなつた。蓄音器を聴かせて貰ひにわざわざ出かけて行つても、最初の二三小節で不意に立ち上つてしまひたくなる。何かが私を居堪らずさせるのだ。それで始終私は街から街を浮浪し続けていた。

この冒頭の段落は、「檸檬」という作品、そして梶井基次郎という作家について論じる際に、必ずと言ってよいほど頻繁に取り上げられてきたところであり、梶井基次郎の作品全体に対する理解と評価のありようが、この部分の解釈にかかっていると、言つてもよいやうに思われる。

作品「檸檬」に対する従来のさまざまな解釈・評価は、この冒頭

の段落から、アルコール依存、肺疾患、神経衰弱、借金、そして、不安、焦燥、虚無といったものによつて生活的・肉体的・精神的に蝕まれた状況の中から、そうした一切のものを超越した価値としての美を求めて彷徨する「私」の姿を読み取ってきた。

作品「檸檬」を、ボードレール風のデカダン詩人の姿を読み取ることによつて評価するもの、あるいは、乱脈な生活を続けるという倦怠から詩的感受性に澄み極まる緊張へと歩む精神の構図として評価するもの、あるいは、感性の織りなす一瞬の恍惚を実生活の代償とする精神の秘密を描いたものとするもの、あるいは逆に、生活現実社会から美という狭く限られた内面世界へ逃避したとして否定するもの——これらの解釈・評価は、それぞれニュアンスの違い、あるいは肯定的評価と否定的評価という違いはあるにせよ、作品「檸檬」を、蝕まれた生活や肉体、そして不安や絶望や倦怠の中で、超越的価値としての美を感じる、「私」の感受性のドラマと解釈し、それを評価の対象としているという点では、一致しているのである。こうした従来の解釈・評価のありようは、この冒頭の段落で、そして、「檸檬」という作品の展開の中で示されている「私」——書き手の認識に添うものであり、それゆえの妥当性は当然であるのであるが、しかし、「私」——書き手の認識に添ったものであるがゆえに、

不十分な解釈・評価に終わっているということもできるように思われる。

すなわち、冒頭の段落によれば、主人公であり書き手でもある「私」は、「えたいの知れない不吉な塊が私の心を始終圧へつけてゐた。」ということに関して、「結果した肺尖カタルや神経衰弱がいけないのではない。また背を焼くやうな借金がいけないのではない。」とし、そして、「いけないのはその不吉な塊」であり、「その不吉な塊」によって、美しい詩や音楽の享受が妨げられ、「それで始終終から街を浮浪し続けていた。」と続けている。

つまり、「私」は、健康や金銭といった、普段の生活において一般的に価値として認められるものの重要性を否定し、詩や音楽の美という芸術的価値を、そうした生活的・世俗的価値以上の価値としているのである。これは、芸術至上主義的な、唯美的・高踏的な芸術家風の認識であると言ってよいように思われる。こうした認識によれば、美という芸術的価値は、健康や金銭といった生活的・世俗的な価値とは相反するものであり、また、そうした生活的・世俗的価値を超越したものである。

そして、作品「檸檬」に対する解釈・評価は、こうした「私」の唯美的で高踏的な、芸術至上主義的な認識にそって行われてきたのである。すなわち、作品「檸檬」を、生活的・肉体的に触まれた状態の中から、超越的価値としての美を獲得する（あるいは、実生活に現実社会から美へ逃避する）感受性のドラマと解釈し、それを評価の対象としてきたのである。

しかし、こうした認識を持っている「私」には、自分自身が直面している事態を充分に説明することができていない。すなわち、以

前には、「私」は美しい詩や音楽に陶醉してきたのである。しかし、今では、どんなに美しい詩や音楽であっても、その一節、最初の二三小節を聞いただけで、いたたまれない気分になってしまふのである。そして、こうした変化の原因について、「私」自身、「えたいの知れない不吉な塊」が心を圧へつけていた、あるいは、「宿醉に相当する時期」がやってきた、あるいは、「何か私を居堪らずさせるのだ」といった、極めて曖昧な形でしか説明できていない。

つまり、「私」は、以前は可能であった美しい詩や音楽の享受が、今は不可能になってしまった原因を、重苦しい圧迫感、焦燥感、嫌悪感として、確かに感じ取っているにもかかわらず、「私」の認識は、そうした感覚に充分についてゆくことができず、何かえたいの知れないものといった形でしか、それをとらえることができないのである。「私」が直面し、感覚的にはとらえている事態は、「私」の唯美的・高踏的な認識によつては説明できないものである。したがって、「私」の唯美的・高踏的な認識に添って作品「檸檬」を解釈・評価するならば、「私」が直面し、感覚的にはとらえている事態は、「えたいの知れない」ものによつて脅やかされるという、説明不可能な根源的不安といったものとしてしかとらえられないであろう。しかし、その「えたいの知れない」ものこそ、「私」の苦しみの原因であり、作品「檸檬」の中で展開される物語の意味を決める状況に他ならない。「私」の唯美的・高踏的な認識は、美しい詩や音楽が辛抱できないものになつてしまつた今、自分自身の感覚によつて裏切られ、崩壊の危機にさらされているのであり、そこで「私」は、唯美的・高踏的な認識を支えてくれる、美的感覚を求めて彷徨しているのである。

そして、たとえ認識的には「えたいの知れない」ものとしてしか描かれてはいなくても、「私」は感覚的にはそれをとらえているのであり、「私」の感覚的な変化の中から、それを読み取ることができるようになる。すなわち、「私」の認識に寄り添った伝記的な読解ではなく、「私」が感覚的にとらえている事態に対して読み手である我々が説明を試みる、積極的な読解によって、「私」にわたる根源的不安といったものが、どういう状況から生じているのかを明らかにすることができるであろう。

例えば、「宿酔に相当する時期」がやってきたという「私」の感覚的類推が的確であるならば、以前に陶醉していた詩や音楽の美の中に、すでに「不吉な塊」は潜在していたのであり、今の状況は、それが感覚的に顕在化してきたのだ、といったことが考えられるように思われる。

そして、美しい音楽が、辛抱できないものに感じられるという事態について、すでに冒頭の段階で描かれていることに注目しておきたい。すなわち「蓄音器を聴かせて貫ひにわざわざ出かけて行つても、最初の二三小節で不意に立ち上つてしまひたくなる。」という部分である。しかし、これは、後にまとめて論じる際の資料として、今は注目するにとどめ、先へ読み進んでゆくことにしたい。

## II

IIにおいては、「私」が友人の下宿を彷徨い出て、「私」の一日の経験が始められる前までを、すなわち、第二段落から第七段落までを分析の対象とする。

では、まず、第二段落と、そして第三段落とを見ることにしたい。

何故だか其頃私は見すばらしくて美しいものに強くひきつけられたのを覚えてゐる。風景にしても壊れかかつた街だとか、その街にしても他所他所しい表通りよりもどこか親しみのある汚い洗濯物が干してあつたりがらくたが転してあつたりむさくらしい部屋が覗いてゐたりする裏通りが好きであつた。雨や風が蝕んでやがて土に帰つてしまふ、と云つたやうな趣きのある街で、土塀が崩れてゐたり家並が傾きかかつてゐたり——勢ひのいいのは植物だけで、時とするときと吃驚させるやうな向日葵があつたりカンナが咲いてゐたりする。

ここで「私」は、汚い洗濯物が干してあつたり、がらくたが転してあつたり、むさくらしい部屋が覗いていたりする裏通りを、廃屋と化しそうな家並に咲く向日葵、滅びゆく街と回帰する自然といった退廃的な美意識に基づいた一枚の風景画のように、視覚的・絵画的な美として享受している。これは、崩れた街並とその中でこそ美しく輝く向日葵やカンナの自然な生命力による、対照的な構図であり、蝕まれた生活の中で獲得される超越的な価値としての美という「私」の認識に基づいたものであるように思われる。

つまり「私」は、詩や音楽の美に辛抱できない圧迫を感じ、それを享受できないという事態に対し、詩や音楽の美に代わる、退廃的な視覚的・絵画的美を見出すことで、唯美的・高踏的認識を支えようとしているのである。

しかし、「私」は、こうした退廃的な視覚的・絵画的美を見出すことだけでは、満足していない。

時どき私はそんな路を歩きながら、不図、其処が京都ではなくて京都から何百里も離れた仙台とか長崎とか——そのやうな

市へ今自分が来てゐるのだ——といふ錯覚を起さうと努める。

私は、出来ることなら京都から逃出して誰一人知らないやうな市へ行つてしまひたかつた。第一に安静。がらんとした旅館の一室。清浄な蒲団。匂ひのいい蚊帳と糊のよききいた浴衣。其処で一月程何も思はず横になりたい。——錯覚がやうやく成功しはじめると私はそれからそれへ想像の絵具を塗りつけてゆく。何のことはない、私の錯覚と壊れかかつた街との二重写しである。そして私はその中に現実の私自身を見失ふのを楽しんだ。

「私」は、壊れかかつた街を、退廃的な視覚的・繪画的美として享受しながら、さらに「錯覚を起さうと努め」、「錯覚と壊れかかつた街との二重写し」の中に、「現実の私自身を見失ふのを楽し」んでゐる。それは、退廃的な視覚的・繪画的美を見出すことだけでは、「現実の私」、すなわち、はっきりと認識できない事態に直面して苦しんでいる「私」にとつての充分な慰めとはならず、さらに空想によつて苦しみから逃れなければならないことを表わしているように思われる。

「私」がここで起こそうと努めている空想は、遠い見知らぬ街で健康的な生活を送る空想であり、「私」が逃げ出したいと願つてゐるのは、蝕まれた生活を送る「私」、そうした「私」の証人である友人たち、そして、京都の壊れかけた街並、すなわち、たつた今退廃的な美として享受した風景からなのである。

続いて、第四・第五段落にも、美しい詩や音楽の代わりに「私」が魅きつけられるようになった物が描かれているが、これらの物も崩れかけた街並の風景と遠い街の空想との二重写しと同様の、二重性を持つてゐるように思われる。

私はまたあの花火という奴が好きになつた。花火そのものは第二段として、あの安つばい絵具で赤や紫や黄や青や、様ざまの縞模様を持つた花火の束、中山寺の星下り、花合戦、枯れすすき。それから風花火といふのは一つづつ輪になつてゐる箱につめてある。そんなものが変に私の心を唆つた。

それからまた、びいどろと云う色硝子で鯛や花を打出してあるおはじきが好きになつたし、南京玉が好きになつた。またそれを嘗めて見るのが私にとつて何ともいへない享楽だつたのだ。あのびいどろの味程幽かな涼しい味があるものか。私は幼い時よくそれを口に入れては父母に叱られたものだが、その幼時のあまい記憶が大きくなつて落魄れた私に蘇つてくる故だらうか、全くあの味には幽かな爽かな何となく詩美と云つたやうな味覚が漂つてくる。

「安つばい絵具で」描かれた多彩な縞模様の花火に心を魅かれることは、みすばらしい裏通りの壊れかけた街並を、視覚的・繪画的な美として享受することと同様な態度である。つまり、「私」は、花火に「みすばらしくて美しい」視覚的美を見出すことによつて、詩や音楽の美が享受できないという事態に対処しようとしてゐるのである。そして、それは、「花火そのものは第二段として」、花火の視覚的美を強調すること、すなわち、子供の玩具という一般的な価値とは別の、そして、それ以上の価値としての美を強調することであり、「私」の唯美的で高踏的な認識を支えるのである。

また、おはじきの味も、享受することのできない本物の詩美に代わる、「何となく詩美といったやうな味覚」である。そして、おはじきを嘗めてみることなど思いもよらない、健康で平凡な大人には

見出すことのできない価値として、すなわち、蝕まれた生活の中で特殊な形に研ぎ澄まされた感覚によってのみ感受される価値として、「私」の唯美的・高踏的な認識を支えるのである。

しかし、花火やおはじきも、音楽や詩の代わりに「私」の唯美的・高踏的な認識を支える、美的な感覚としてのみ「私」を魅きつけているのではない。縞模様の花火や、一つづつ輪になって箱につめてある風花火に心を唆られたり、おはじきを口に入れてみたりすることは、現在の「落魄れた私」から、「幼時のあまい記憶」へと続く郷愁である。つまり、前の段落では、遠い仙台や長崎の街へ行きたいという、空間的な形で表わされていた逃避願望が、ここでは、幼時への郷愁という、時間的な形で表わされているのである。

では、「私」の唯美的で高踏的な認識ではとらえられず、「私」を不安にしている事態、それに対して、「みすばらしくて美しい」という退廃的で特殊な美によって対処しながらも、なお充分な満足が得られない事態とは、いかなるものであろうか。

生活がまだ蝕まれてゐなかつた以前私の好きであつた所は、例えば丸善であつた。赤や黄のオードロンやオードキニン。洒落た切子細工や典雅なロココ趣味の浮模様を持つた琥珀色や翡翠色の香水壺。煙管、小刀、石鱗、煙草。私はそんなものを見るのに小一時間も費すことがあつた。そして結局一等いい鉛筆を一本買ふ位の贅沢をすのだつた。然し此処ももう其頃の私にとつては重くるしい場所に過ぎなかつた。書籍、学生、勘定台、これらほみな借金取の亡霊のやうに私には見えるのだつた。

生活が蝕まれる以前の「私」は、丸善で売られている高価で美し

い品物、例えば、洒落た切子細工や典雅なロココ趣味の浮模様の香水壺などの小物類を小一時間も眺めている。丸善では、他では見ることのできないロココ調の美、すなわち、重厚なバロック芸術に対して、浮模様といった技法に象徴される、軽快で流麗な絵画的美をめざしたロココ芸術といったものを垣間見ることができていたのである。つまり、「私」にとつて、丸善は、視覚的・絵画的な美を享受する場所だったのである。

ところが、生活を蝕まれてしまった「私」にとつて、丸善は、重苦しく、いたたまれない場所に変つてしまふ。しかし、依然として「私」は美を求めているのであり、そこで、壊れかけた街並の中に退廃的で絵画的な美を見出したり、丸善の高価で美しい小物の代わりに、花火やおはじきといった、経済的価値は低いが美しい物で心を慰めているのである。

こうした「私」の嗜好の変化によって、高価な物の美ではなく、みすばらしい物の美、すなわち経済的・世俗的な価値とは別の、自律的で超越的な価値としての美と、それを感受できる「私」とが鮮明に浮かびあがる。すなわち、「私」は、世俗的・経済的な価値と背反する美を感受することによって、唯美的で高踏的な認識を立ち直らせ、依然として保持しようとしているのである。

一方、以前に丸善で享受していた美は、実は「私」の唯美的・高踏的認識に反した、高価な商品の美、すなわち経済的価値と一体になった美だったのである。「私」が眺めていたのは、ロココ芸術そのものではなく、ロココ芸術の模写を付けられた香水壺だったのであり、つまり、丸善における「私」の美の享受は、模写と金銭とを媒介にすることによって、美を一般に解放した商業システムを通じ

てなされていたのである。「私」の認識は、美を、金銭という世俗的価値とは別の、それを超えた価値とし、美のためには、当時としては生命の危険すら意味した肺疾患をも問題としない程、掛け替えない個別的な価値としてとらえているにもかかわらず、「私」が実際に享受していたのは、金銭と模写とを媒介として、誰でも自由に、何度でも得ることができる美だったのである。

したがって、こうした、美という芸術的価値を一般的・大衆的なものとして解放した商業システムを通じてなされる美の享受という経験と、美を一般的・日常的な価値、例えば経済的価値といったものとは全く異質な、超越的価値としてとらえる、唯美的で高踏的な認識との食い違いが顕在化し、それを感じざるをえなくなってきたことが、「えたいの知れない不吉な塊」による庄迫感として描かれているように思われる。

「私」自身、丸善が重苦しい場所に変ったことについて、書籍や学生、勘定台といったものが「借金取の亡霊のやうに私には見えるのだつた」と説明してはいるが、「私」が苦しんでいるのは、単なる借金といったものではない。冒頭に書かれているように、「借金などがいけないのではない」のである。「私」を重苦しくしているのは、超越的なものであるはずの美の享受の中に、借金といった世俗的な問題が侵入しようということであり、借金などの生活の賭れが契機となつて、美の享受が商業システムを通じて行われ、美的価値と経済的価値とが一体化しているという事態に気づかざるをえないことなのである。丸善での経験、重苦しい庄迫感といったものが、単純な経済的問題によるものであれば、経済的な価値とは異質なく、それを超える価値を求めている「私」に、重大な苦しみを与え

ることなどありえないのである。

そして、冒頭の段落で、「私」を、重苦しい、いたたまれない気分にする物として描かれていた蓄音器の場合も、「私」と美しい音楽との間には、音楽の再生を何度でも可能にする蓄音器という高価な機械が存在していたのであり、やはり丸善と同様に、模写と金銭とを媒介とすることによって、一般化・大衆化された美が享受されていたのである。

しかし、こうした事態に直面しながらも、「私」は、事態を認めようとはせず、それまでの唯美的・高踏的な認識を守ろうとしている。すなわち、丸善やはなやかな表通りを避け、「みすばらしく美しいもの」、すなわち、一般的・経済的には低い価値しか持たないが、美的には高い価値を持つものを見出すことによって認識を支えているのである。つまり、「私」は、一般的・経済的なものを排除した認識を保持しようとしているのであり、逆にそのことが、一般的・経済的なものとして美が現われるという事態を、「えたいの知れない不吉な塊が私の心を始終圧へつけてゐた」としか認識できないものにしていくということもできる。すなわち、認識的に排除しようとしているものによって脅やかされるという、不安な状態に、「私」はおちいるのである。

### Ⅲ

ある朝——其頃私は甲の友達から乙の友達へといふ風に友達の下宿を転々として暮してゐたのだが——友達が学校へ出てしまつたあとと空虚な空気のなかにぼつねんと一人取残された。

私はまた其処から彷徨ひ出なければならなかつた。何かが私を

追ひたてる。

ここに描かれている「私」は、Ⅱにおいて読み取ってきた「私」、すなわち、何か自分ではわからない不安に迫りたてられて、虚無と倦怠といった空気の中に安住していることができなくなり、彷徨する「私」である。そして、そうした「私」は、まず一軒の果物屋の前に立ち留まる。

此處でちよつと其の果物屋を紹介したいのだが、其の果物屋は私の知っていた範囲で最も好きな店であつた。其處は決して立派な店ではなかつたのだが、果物屋固有の美しさが最も露骨に感ぜられた。果物は可成勾配の急な台の上に並べてあつて、その台といふのも古びた黒い漆塗りの板だつたように思へる。何か華やかな美しい音楽の快速調の流れが、見る人を右に化したといふゴルゴンの鬼面——的なものを差しつけられて、あんな色彩やあんなヴオリウムに凝り固まつたといふ風に果物は並んでいる。青物もやはり奥へゆけばゆく程堆高く積まれてゐる。

——實際あそこの人參葉の美しさなどは素晴しかつた。それから水に漬けてある豆だとか葱姑だとか。

また其處の家の美しいのは夜だつた。寺町通は一体に賑かな通りで——と云つて感じは東京や大阪よりははずつと澄んでゐるが——飾窓の光がおびただしく街路へ流れ出ている。それがどうした訳かその店の周囲だけが妙に暗いのだ。(略)もう一つは其の家の打ち出した廂なのだが、その廂が眼深に冠つた帽子の廂のやうに——これは形容といふよりも、「おや、あそこの店は帽子の廂をやけに下げてゐるぞ」と思はせる程なので、廂の上はこれも真暗なのだ。さう周囲が真黒なため、店頭に点

けられた幾つもの電燈が驟雨のやうに浴せかける絢爛は、周囲の何者にも奪はれることなく、肆にも美しい眺めが照し出されてゐるのだ。裸の電燈が細長い螺旋棒をきりきり眼の中へ刺し込んで来る往来に立つて、また近所にある鎧屋の二階の硝子窓をすかして眺めた此の果物店の眺め程、その時どきの私を興がらせたものは寺町の中でも稀だつた。

ここで書き手である「私」がとっている態度は、従来言われてきたやうに、画家としての態度であり、ここに描かれているのは視覚的・繪画的美であるように思われる。すなわち、寺町の明と対比される果物屋の暗、その果物屋の暗と廂によつてはっきりと区切られた果物屋の中の明、そしてさらに果物の並べられている黒い台の暗、これらの明暗の対比と、それが繰り返されることによる色の階調とを背景として鮮やかに浮かびあがる人參葉などの静物を、「私」はあるときは往来に立ち、また別のときには二階の窓をすかしてというやうに、視点を選びながら眺めているのである。

そして、こうした一枚の繪画、繪画的美の中心とされている果物や青物は、「華やかで美しい音楽の快速調の流れが、見る人を右に化したといふゴルゴンの鬼面——的なものを差しつけられて、あんな色彩やあんなヴオリウムに凝り固まつたという風に」並んでゐると描かれている。すなわち、ここでの繪画的美は、「私」が享受できなくなっている美しい音楽が魔術的な力で静止させられ、色や形を与えられたものとして描かれ、また同様に享受できなくなっている丸善の美、軽快で流麗で、視覚的な美が、暗い裏通りの果物屋の中に見出されたものとして描かれているのである。つまり、この果物屋は、一般的・經濟的価値を排除し、より純粹化された丸善なの

である。

そして、「私」は、この果物屋で一個の檸檬を買うことによって、始終心を圧えている「不吉な塊」から逃れるのである。

その檸檬の冷たさはたとへようもなくよかつた。その頃私は肺尖を悪くしてゐていつも身体に熱が出た。事実友達の誰彼に私の熱を見せびらかす為に手の握り合ひなどをして見るのだが、私の掌が誰のよりも熱かつた。その熱い故だつたのだらう、握つてゐる掌から身内に浸み透つてゆくやうなその冷たさは快いものだつた。

私は何度も何度もその果物を鼻に持つて行つては嗅いで見た。その産地だといふカルフォルニヤが想像に上つて来る。漢文で習つた「売柑者之言」の中に書いてあつた「鼻を撲つ」といふ言葉が断れぎれに浮かんで来る。そしてふかぶかと胸一杯に匂やかな空気を吸込めば、ついぞ胸一杯呼吸したことになつた私の身体や顔には温い血のほとぼりが昇つて来て何だか身内に元気が目覚めて来たのだった。……

実際あんな単純な冷覚や触覚や嗅覚が、ずっと昔からこればかり探してゐたのだと云ひ度くなつた程私にしつくりしたなんで私は不思議に思へる。それがあの頃のことなんだから。

「私」は、「不吉な塊」が弛み、幸福になつたことについて、熱を持つた掌に檸檬の冷たさが快かつたこと、また、檸檬の匂いを胸一杯に吸込んで元気が目覚めてくるような気がしたこと、と分析を進め、そしてそれを途中で放棄している。「私」には、「不吉な塊」を弛ませたものは「単純な冷覚や触覚や嗅覚」としてしか分析できなかつたのであるが、そうした分析だけでは、「私」自身納得でき

ないのである。

そして、確かに、それが単純な冷覚や触覚や嗅覚といったものだけではなかつたことは、その後の「私」の態度に表われている。

私はもう往来を軽やかな昂奮に弾んで、一種誇りかな気持さへ感じながら、美的装束をして街を闊歩した詩人のことなど思ひ浮かべては歩いてゐた。汚れた手拭の上へ載せて見たりマントの上へあてがつて見たりして色の反映を量つたり、またこんなことを思つたり

——つまりは此の重さなんだな。——

その重さこそ常づね尋ねあぐんでゐたもので、疑ひもなくこの重さは総ての善いもの総ての美しいものを重量に換算してきた重さであるとか、思ひあがつた諧謔心からそんな馬鹿げたことを考へて見たり——何がさて私は幸福だつたのだ。

ここで「私」は、はっきりと耽美的で高踏的な詩人風の自己をイメージし、超越的な価値を獲得した思いで誇らかな気持にさえなつてゐる。一個の檸檬が、「私」にとつて、「総ての善いもの総ての美しいものを重量に換算してきた」ものとまで感じられるのである。

そして、この超越的価値感覚は、「私」の蝕まれた生活から生じてゐる。檸檬は、その冷たい感触ゆえに快であり、価値なのであるが、それは単純な冷覚としての価値ではなく、肺疾患のために他の誰よりも熱い掌をしている「私」にしか感受できない感覚であるがゆえの価値である。また、檸檬のさわやかな香りも、普段胸一杯の呼吸すらできない「私」にこそ感受できる価値である。つまり、檸檬は、汚れた手拭や黒いマントを背景にしてこそ、その色彩が輝くように、現実の蝕まれた肉体や生活に対する不安や絶望の中でこそ



感受することのできる、超越的価値として、「私」の崩れかけた唯美的で高踏的な認識を支え、「私」を元気づけているのである。

こうして、超越的価値を獲得したという興奮につつまれて、「私」は、平常避けていた丸善へと入って行く。しかし、丸善に入ると幸福感は失われ、憂鬱がたてこめてくる。とりわけ「私」を憂鬱にするのは画集である。

私は画本の棚の前へ行つて見た。画集の重たいのを取り出すのさへ常に増して力が必要なのと思つた。然し私は一冊づつ抜き出しては見る、そして開けては見るのだが、克明にはぐつてゆく気持は更に湧いて来ない。然も呪はれたことにはまた次の一冊を引き出して来る。それも同じことだ。それでゐて一度バラバラとやつて見なくては気が済まないのだ。それ以上は堪らなくなつて其処へ置いてしまふ。以前の位置へ戻すことさへ出来ない。私は幾度もそれを繰返した。たうたうおしまひには日頃から大好きだったアングルの橙色の重い本まで尚一層の堪へ難さのために置いてしまつた。

「私」の置かれている状況が、ここに集約的に描かれている。「私」は、画集を開くことで、視覚的な美を得ることが出来る。しかし、それに耐えられない。模写を載せた商品としての画集は、「私」にとって固有の超越的価値であるべき美を、一般的・世俗的価値と結びつけ、「私」の認識を解体するからである。しかし、一方では、画集は、生活的・実用的価値ではない、美的価値を持つものでもあり、「私」は画集を開いてみないではいられないのである。

こうした、美の享受が、模写と金銭とを媒介として、一般化・大

衆化された形で行われるという事態に対して、「私」は、唯美的で高踏的な認識を支える、超越的価値の象徴とも言うべき、一個の檸檬様によって対抗しようとする。それは、画集を山のように積み上げ、その中心に檸檬を据えるという形で行われる。

見わたすと、その檸檬の色彩はガチャガチャした色の諧調をひっそりと紡錘形の身体の中へ吸収してしまつて、カーンとやえかへつてゐた。私は埃っぽい丸善の中の空気が、その檸檬の周囲だけ変に緊張してゐるやうな気がした。私はしばらくそれを眺めていた。

画集の雑多な諧調の中心に檸檬を据えるという構図は、京都の壊れかけた街並の雑多な物の中心に向日葵が据えられ、また果物屋の明と暗との諧調の中心に人参葉などの静物が据えられたのと同様の構図である。これらの絵画的・視覚的美は、詩や音楽の代わりであると同時に、丸善の画集の美に代わるものとして「私」を慰めていたのである。

かりに、この、あらゆる雑多なものを吸収してやえかえる檸檬を眺めることによって、「私」の苦悩が解決され、崩れかけた唯美的・高踏的認識が完全に回復された形で、「檸檬」という作品が終っているならば、それは、現実を超越する美を描いた作品として、あるいは、現実から美への逃避を描いた作品として解釈・評価されるであろう。しかし、京都の壊れかけた街並を退廃的な美として享受したときと同様に、ここでも「私」は、さらに空想を追求しようとするのである。

不意に第二のアイデアが起つた。その奇妙なたくらみは寧ろ

私をきよつとさせた。

— それをそのままにしておいて私は何喰はぬ顔をして外へ出る。

(略)

変にくすぐつたい気持が街の上の私を微笑ませた。丸善の棚へ黄金色に輝く恐ろしい爆弾を仕掛けて来た奇妙な悪漢が私で、もう十分後にはあの丸善が美術の棚を中心として大爆発をするのだったらどんなに面白いだろう。

私はこの想像を熱心に追求した。「さうしたらあの気詰りな丸善も粉葉みじんだらう」

そして私は活動写真の看板画が奇体な趣きで街を彩つてゐる京極を下つて行つた。

画集の山に据えられた檸檬も、「私」を一時的に立ち止まらせただけであり、作品「檸檬」の結びにおいても、「私」の彷徨は終らない。「私」の求める、真に純粹な美は得られず、問題は残されたままなのである。

美が商業システムによって供給されるという事態に対抗するものとして、「私」を慰める、花火やおはじきや南京玉、そして、それらの代表とも言うべき檸檬も、決して完全に商業システムから逃れてはいないのである。花火やおはじき、南京玉については次のように書かれている。

察しはつくだらうが私にはまるで金がなかつた。とは云へそんなものを見て少しでも心の動きかけた時の私自身を慰める為には贅沢といふことが必要であつた。二銭や三銭のもの——と云つて贅沢なもの。

また、檸檬についてはこう書かれている。

その日私は何時になくその店で買物をした。といふのはその店には珍らしい檸檬が出てゐたのだ。檸檬など極くありふれてゐる。が其の店といふのも見すばらしくはないまでもただあたりまへの八百屋に過ぎなかつたので、それまであまり見かけたことはなかつた。

花火やおはじき、そして檸檬も、やはり店で売られてゐる商品であり、そうした意味でも商業システムから逃れてはいないのであるが、問題はそう単純ではないように思われる。すなわち、たとえ、「私」が丸善に持ち込んだものが、商品として売つてゐるものでなかつたとしても結果は同じだつたように思われるのである。

花火やおはじきは、たとえ二・三銭のものではあつても、まるで金のない「私」にとつては、贅沢なものである。そして、檸檬は、あたりまえの八百屋にでも、まれには見かけるような、「極くありふれた」果物であつても、「私」にとつては、花火やおはじき以上に贅沢なものであろう。「私」は、まるで金がなく、借金を背を焼かれるような思いをしているにもかかわらず、これらの贅沢なものをかうするのであるが、それは、子供の玩具にしようとか、食べようとかいう実用的・生活的な理由からではなく、逆に、実用的・生活的な価値を超越した美という価値からなのである。そして、この、美という超越的価値を支えられた贅沢という点において、花火も檸檬も、丸善の商品と同じなのである。

丸善の商品は高価であり、花火やおはじきは安価であるが、「私」にとつての生活的・実用的価値という点では、どちらも無用なものである。丸善で「私」が心を魅かれた、香水や煙管、小刀、石鹼、

煙草などの高級品は、みな嗜好品か、それに類するものである。こうしたものを買うことは、実用的価値にかこまれた生活の日常性を破り、実用的価値を超える、贅沢の楽しみを与えてくれるのである。そして、香水につけられた赤や黄の美しい色や、その握の洒落た切子細工やロココ調の浮模様の美しさは、こうした贅沢の楽しみを支え、その超越性を保証し、購買欲をそそるのである。

画集の場合にはさらに明確であり、画集が商品となっているのは、それが美という超越的価値として、人々の欲求の対象となるからである。つまり、美が商業システムを通じて供給されるという事態は、超越的価値としての美を金銭といった経済的・世俗的価値と結びつけ、純粹な美を求める「私」をいたたまれない気分にするのであるが、それは、美の超越性を破壊することではなく、美の超越性が商業システムの中に、そのまま取り込まれることなのである。美を供給する商業システムを成立させているものは、他ならぬ美の超越性なのであり、超越的価値としての美を強調することは、美を供給する商業システムから逃れることでも、それを破壊することでもなく、逆に、それを支えることに他ならないのである。

「私」が、作品「檸檬」の最後に追求する空想は、こうした不満すなわち超越的な価値としての美を強調することによって、美を供給する商業システムに充分に対抗できないところから生じる不満を表わしているように思われる。「私」は、超越的価値としての美を求めるがゆえに、商業システムの供給する美では我慢できないのであるが、その超越的価値としての美は商業システムの中に取り込まれており、逆に、超越的価値を求めるがゆえに、商業システムからも逃れられないという循環の中にある。そして、丸善が美術の棚

を中心として大爆発するという空想は、そうした循環を打ち破りたという願望の表われなのである。しかし、それは空想に止まり、「私」は依然として、美を求めると同時に、それから逃れてゆくという循環の中で、彷徨を続けるのである。

#### IV

以上論じてきたことから、作品「檸檬」に描かれているのは、美が、商業システムを通じ、模写と金銭とを媒介として供給され、日常生活の中で消費されるという状況の中で、そうした状況に適合できなくなった唯美的・高踏的認識を持つ「私」の苦悩であると言つてよいように思われる。それまで、世俗的な価値とは全く異質な、それを超える価値として認識されてきた美が、世俗的な価値の中に取り込まれる形で現われ、しかも、それを通じてこそ美の享受が可能になるということが、「私」の苦しみの原因なのである。

「私」の認識にそつて言えば、こうした美の商業化・大衆化という問題は充分に認識されておらず、むしろ、「私」は、一個の檸檬によってこの問題の存在を否定しようとして試み、それで満たされないものは、空想による逃避で解消しようとしているとも言つてもできるであろう。

しかし、作品「檸檬」は、この問題が解決されたという形ではなく、最終的には保留された形で描かれており、「私」が単に逃避的ではなく、問題に立ち向う姿勢をとり、そしてなお、解決が保留されたことによって、この問題の深さが明らかになっているということができるように思われる。

そして、この「檸檬」という作品以後、より暗い作品が書かれて

ゆき、その一方で、資本論に興味をひかれ、マルクシズムに関心をもち続け、自ら構成した美的世界に満足しないで、それから脱する形で最後の作品「のんきな患者」が書かれるという、梶井基次郎という作家の軌跡は、美の商業化・大衆化という問題に直面したところから彼の文学が出發しているという視点から見た時、連続した明快なものとして見渡すことができるように思われる。資本論は、「檸檬」で描かれている、「私」が脱け出せない循環を生み出している商業システムについて、認識を与えてくれるものとして興味の対象となつたのではないだろうか。

したがって、作品「檸檬」は、そうした自己の根底の問題として、美の商業化・大衆化の問題を描いた作品であると言ふことができると思われるのである。

そして、梶井基次郎のような美的な作家ばかりではなく、この時期の多くの作家が、その求める芸術的価値や政治的価値に違いはあつても、この商業化・大衆化の問題に直面したのであり、それらは、こうした視点からさらに論じられるべきものであるように思われるのであるが、それは別稿に譲ることにして、今はここで筆をおきたい。